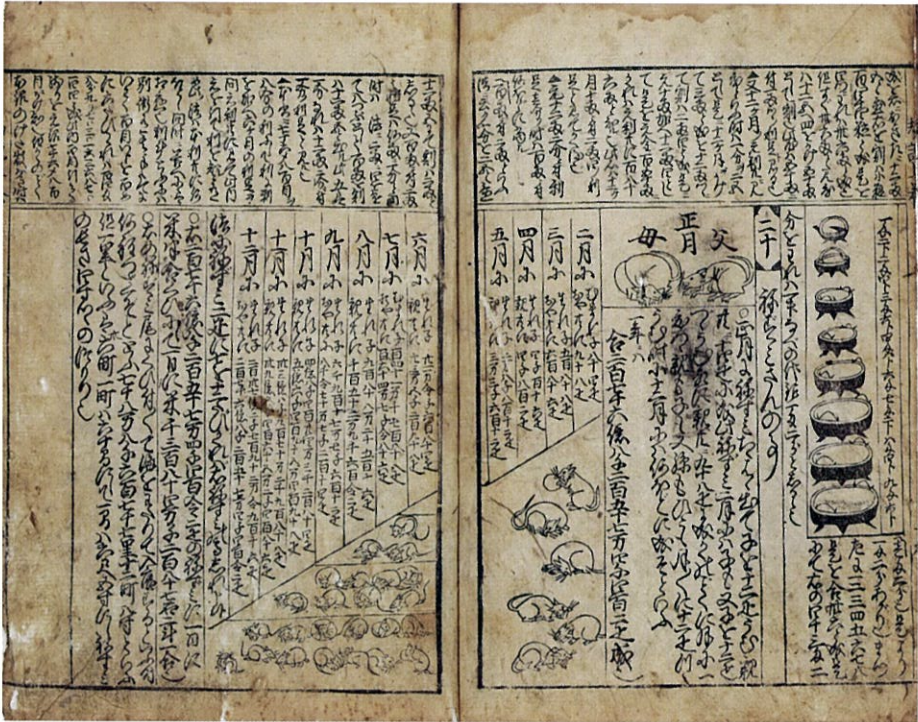


やまとの名品 天理図書館



しんべんじんこう き
新篇塵劫記

吉田光由著

元禄10年(1697)刊 3巻合1冊

縦27.0cm 横18.5cm

算額さんかくという言葉をご存知でしょうか。神社や仏閣に奉納した数学の絵馬えまのことです。算額の奉納は、問題が解けたことを感謝したり、学業成就を願って和算わさんの研究者が納めたのがきっかけで、江戸時代の知的な遊びとして広まりました。

そのような算額は、今も全国に一〇〇〇近く残っていることから、日本中で奉納が盛んに行われていたことが窺うかがえます。因みに、和算というのは、明治新政府が導入した西洋の数学に対して、古くから日本にあった数学のことで、耳みみに馴染なじみ深い「鶴亀算つるかめざん」、旅人算たびびとざんも和算です。

和算書「塵劫記」

は、寛永四年（一六二七）、京都の豪商角倉氏まゐくらの一族、吉田光由みつよし（一五九八〜一六七二）が著著しました。掛算の九九、面積、測量、算盤そろばんによる四則計算等の実用算術のほか、開平・開立かひりつ（平方根・立方根を求める）、さらに「ねずみ算」のようなパズル問題、大きな数では、コンピュータの世界などで使われる「京けい」もつと大きな「垓がい」「穰じょう」等、普段聞くこともない単位を載せ、これらの内容を挿絵さしえ入りで分かり



易やすく解説かいせつしました。後に和算を大成させた関孝和せきたかかず等学者・研究者に影響を与えただけでなく、庶民にも大変親しまれました。本書は最初の出版から七十年後に出されたものですが、このように増補・改訂等度度も版を重ねて広く流布りゅうぷしました。それが数学レベルを底上げし、ブームへとつながったのです。この大ベストセラーからは、和算を楽しみ、算額を奉納する人たちの知的に遊ぶ姿が見えてきます。（天理図書館 内藤和子）